蟲

しずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
蟲

【Ｎコード】
Ｎ７３７１Ｍ

【作者名】
しずく

【あらすじ】
突如刺された一匹の虫。
見た事の無いその虫は…。

あぁ…お腹空いた……

…あぁ……

それは前触れもなく訪れた。

「痛っ！！」

２２時。外はもう暗い。

夕飯を食べ終わって暫くして、自分の部屋ベッドに横たわり仰向けで漫画を読んでゆっくりしている所を、体が跳ねる程のとんでもない激痛が襲った。

彼女の名前は長谷川亜弥［はせがわあや］。

どこにでもいる普通の高校生だ。

思わず手に持っていた漫画をバサリと落としてしまった。
漫画は胸元へと落下する。
亜弥は、落ちて折れ目の付いてしまった漫画の事も気にせず、
跳ね起きるとズキズキと痛んだ左の手の甲を見た。

「やだ……何…？」

そこには、蚊を一回り大きくしたような虫が
口から生えた針を深々と突き刺していた。
見た事の無い虫、ゾクリと背中を震わせて亜弥は呆然とそれを見つめた。

だが見慣れてしまえば痛みの増す感覚に、亜弥は徐々に苛立ち、
反対の手を掲げると思い切り叩き潰した。

ブジュッ…

嫌な粘着音をさせて虫は潰れた。

「あー…もう、やだなぁ…」
亜弥はぬめりとした感触に顔をしかめ、ティッシュを数枚取ると
既に息のない残骸を拭き取りゴミ箱に思い切り投げ捨てた。

漫画を読み続ける気にもなれず、本を棚に戻すと

部屋を出て手を洗いその日はそのまま眠りについた。

次の日の授業中…

虫に刺された所が疼き、
亜弥は無意識のうちに何度もそこを掻いていた。
あまりの痒さに授業に身が入らない…。

「あーやっ！！」
下校途中、亜弥が一人で歩いていると後ろから肩を叩かれた。
同じクラスで仲のいい、森下未来［もりしたみく］だった。

二人楽しげに他愛もない話をしながら一緒に帰っていたが、
ふと未来がある一点に視線を留めさせ、怪訝な表情をしながら言った。

「亜弥…どうしたの、その手…？」

「え…？」

亜弥は一瞬何の事を言っているのか分からなかったが、
未来の視線が未だ離れない自分の手にあるのに気付き
「ああ…」といながら自分もそこに視線を移した。

手の甲は掻き過ぎで真っ赤に腫れ血が滲み、
掻いていた右手も、爪から指の第一関節に渡って薄く血で汚れている。

「何か昨日変な虫に刺されちゃってさぁ…
蚊かなぁ？よく分からないんだけど。やんなっちゃうよ」
はぁ、と溜息を着き亜弥は昨日の夜の出来事を話し始めた。
「それにしてもやりすぎだよー…」
未来は心配そうに小さく呟いた。
鞄の中からティッシュを取り出すと一枚差し出す。
未来はありがとう、と一言礼を言って受け取ると汚れた血を拭った。

未来とは途中で別れ、亜弥は一人になった。
無言で一人歩く帰り道。
未来は、気付かないうちにまた手の甲を掻いている。
先程折角貰ったティッシュは…どこに行ってしまったのか
いつの間にか手元には無く、また指先と甲を赤く染めていた。

「お腹空いたなぁ……」

その日の夕飯は、亜弥は自分でも信じられないくらいよく食べた。

また次の日、未来は亜弥を見て驚いた。
昨日別れるまでは普通だったのに、
亜弥のやつれ方が尋常じゃなかったからだ。

瞳に光がなく、手足がやせ細っている。
手の甲だけが掻き過ぎで赤く膨らんでいる。
亜弥は、何かをブツブツと呟きながら
ガリガリと手の甲を掻き続けていた。

そして、昼休み中に亜弥は姿を消した。

未来は少し経てば戻ってくると思っていたがそんな気配はなく、
学校が終わると心配して亜弥を探しに街を歩き回った。

夜……

未来は歩き回ってヘトヘトになっていると
公園の中にある大きな木の横に立っている亜弥の後ろ姿を見つけた。
暗闇に目が慣れると、紛れもない制服姿の亜弥だった。
何をしているでもなく、ただ微動だにせず立ち竦んでいる。

「亜弥…亜弥っ！！」

疲れた足の事よりも友達が見つかった喜びに
思わず大声で名前を呼びながら走り寄った。

「亜弥…よかった…探、し…」

亜弥の肩に手を掛けると亜弥はゆっくりと未来の方を振り返った。
未来は反射的に掛けていた手を離すと、サッと顔を青褪めさせて
一歩後ろによろめきながら距離を離した。

亜弥の眼は左右違う方向を見ていて、
荒く呼吸する口元からは唾液が流れ落ちていた。

「あぁ…あっ……」

その人間と言い難い恐ろしい表情にまともに喋れない未来は、
泣きそうになりながらガクガクと足を震わせた。

「オ腹がネェ…スぃたノョ…」

妙なアクセントを付けた喋り方で、亜弥は未来に言った。
喋る度に垂れた唾液が口端から溢れ出る。
まるでゾンビのような歩き方で、亜弥は未来の方に歩いて来た。

「…ひっ……」

未来は恐怖で腰を抜かし、泣きながら
ソレから離れようと一生懸命に後ろに下がるが、
震える手足にうまくいかずにその場でもがいているだけになった。

「……肉、ニクククククク」

襲い掛かる亜弥に、未来は叫びながら頭を抱えた。

……

「……み、ク…」

暫くして、自分の名前が微かに呼ばれる。
未来は、涙目で恐る恐る顔を上げて亜弥を見た。
亜弥の眼は相変わらずおかしい方向に向いているが、
その眼から涙が流れていた。

「……に、げテ…」
「……ぇ…？」
「私ハ虫に…ァノ虫に、感染させ……逃げ…未…グッ…」
突如、亜弥は大声を上げて苦しみ出した。
その場に膝立ちに崩れ落ち、必死に喉を掻き毟っている。

「あ〝ァぁあァあ〝あアーーーーッ！！！！！」

一際大きい叫び声と共に、バリッと音がして、
亜弥の背中がパックリと割れた。
中からは小さい大量の虫が羽を震わせ飛び出てくる。

「きゃあああぁあああーーーっ！！！」

未来は叫び声をあげ、必死の思いで立ち上がると
その場から泣きながら走り去った。
その場に崩れ落ちた亜弥は、何度か痙攣を繰り返し、そのうち死亡した。

あれから、亜弥の姿を見掛けた者はいない。
未来はあの日の夜の出来事を思い出すのも恐ろしく、
誰にもこの話をする事はなかった。

今、亜弥は捜索願いが出ていて
街の至る所に顔写真入りのポスターが貼ってある。

未来は、ポスターの中で笑っている亜弥を見て
そっとその写真に手を触れた。
あんなに泣いた筈なのに、また涙が溢れた。

ふと、その亜弥の顔写真の上に一匹の虫が止まった。
それを見た瞬間に、未来はカッとなり手で叩き潰した。

「亜弥を…亜弥を返して…っ」

呟きながら未来はその場に泣き崩れた。

その日の夜、未来は手の平に痒みを感じ、
知らずうちに掻いていた。
最初は気に止めていなかったが、
真っ赤になった手の平に驚き、そして亜弥を思い出した。

あの虫のせいなのだろうか…
でも、刺されていないはず…

……まさか…

……

「……？」

ふと、未来が我に返った。
「え…？あれ…？」
さっきまで何かを考えていたはずなのに、記憶が途切れている。
私、何を考えていたのかしラ…

「……あぁ…お腹空いた…」

ブツブツと呟きながら未来は手の平を掻きながら台所へ向かった。
誰もいない部屋を、一匹の虫が飛んでいた。

（後書き）

蚊に刺されたら、お気をつけ下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7371m/

蟲

2010年10月10日06時31分発行